

注意集中困難・多動性発達障害児の発達支援と学校適応に関する

臨床発達心理学的研究

(課題番号 14510139)

平成14年度科学研究費補助金

基盤研究(C)(2)

研究成果報告書

平成16年3月

研究代表者 浅川潔司

注意集中困難・多動性発達障害児の発達支援と学校適応に関する
臨床発達心理学的研究
(課題番号 14510139)

平成14年4月～平成16年3月

研究分担者

兵庫教育大学学校教育学部	教授	浅川潔司
兵庫教育大学学校教育研究センター	教授	古川雅文
兵庫教育大学学校教育学部	教授	夏野良司
(現愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター	教授)	
兵庫教育大学学校教育学部	講師	石橋尚子
(現梶山女子学園大学 講師)		
兵庫教育大学学校教育学部	講師	秋光恵子

研究協力者

兵庫教育大学学校教育学部	助教授	辻河昌登
兵庫県立高校	スクールカウンセラー	樋渡千恵
広島大学大学院教育研究科博士課程前期		福本理恵

研究協力者は、研究分担者とともに本研究に従事し、その成果を学会等に発表してきた者であるが、規定上正規の研究分担者として登録されていないために、このように区別された。

研究発表

これまでに行われた研究発表は以下に記すとおりである。

- (1) Asakawa, K., Kogawa, M., Natsuno, Y., Hiwatari, C., & Fukumoto, R. 2004 The effects of Teachers' Attitude toward The Child on Their Perception of Behavioral and Emotional Difficulties in Children with AD/HD, Paper presented at the meeting of 2004 Hawaii International Conference of Education, in Honolulu, Hawaii.

はじめに

これまでの特殊教育の対象者だけでなく、その対象ではなかったLDやAD/HD或いは高機能自閉症を含む障害を持つ児童を対象にその一人一人の教育的ニーズを把握して当該児童生徒の持てる力を高め学校における生活や学習上の困難を改善し克服するために行う教育は特別支援教育とよばれる(中井、未公刊)。

ここでいわれる高機能自閉症、注意集中困難(欠陥)多動性障害(AD/HD)、学習障害、発達性協調運動障害、軽度・境界域の知的障害などのハンディキャップを有し、独特な困難を持つ子どもたちを軽度発達障害とよぶ(例えば、杉山、2000)。

このような幼児・児童の行動や発達上の特徴については、近年AD/HDやLDに対する情報が周知されるに伴って、理解が深まるようになってきてはいるが、これらの障害の認知的側面や行動的側面の理解、両者の関係性がまだ理解されてきていないといえない。

本研究では、主としてAD/HDとみなされる幼児や児童を対象に彼らの日常生活における生活環境である教育機関での行動に焦点をあて、学校場面で生じる様々の行動上の問題を明らかにするとともに、その克服に向けての有効な支援の介入方法について検討することが主たる目的であった。学校場面における介入を考えるのは、ややもすると、AD/HDの子どもたちはその行動特性により、保護者からばかりではなく、周囲の子どもたちや教師から奇矯な行動を取る子とか気がかりな子といった認知がなされがちである。時にはそのために苛立つ他の児童からのいじめの対象になることもあるし、強い叱責や禁止あるいは無視や懲戒を大人から受けることもある。このように否定的な対人関係の中で、著しく自己評価を低下させることとなる。さらに、情緒的な混乱が生じ、それが別の行動面での問題を生ぜしめるが、そのために生起する二次的障害を阻止することは、事後の人格や社会性の発達を支援するという点で意義は深い。と

くに、小学校高学年まで真実的な問題を引きずるのではなく、低学年の次期に適切な支援的介入を行わなければ、必要以上に時間を要することになるのである。したがって、できれば、幼児期に、遅くとも小学校低学年には介入が開始される必要性があろう。そのためには、教員の間では必ずしも明確でないAD/HD児の行動特徴の理解基準を確立すると同時に、教育機関外にいる各種の専門職(Professional Out-Resources)との連携のあり方を考えるべきであろう。

本研究では、この点を考慮して、外部から学校教育に関わるスクールカウンセラーとその実習生と、学校内の教員とのチーム支援が導入され、その効果が検証された。ここで、チーム支援がなされたのは、それが、子児童個人を寄り多角的な面から理解することが可能であること、支援を継続的に行うには体制作りが欠かせないこと、参加者が相互補完的な支援を行うことで、支援効果がいっそうますことなどがかんがえられたからであった。さらに本研究では、小中学校の教師が、軽度発達障害を有する児童生徒が示す種々の行動に関して、どの程度学校外部の専門家の援助を必要としているのかが検討された。これまで、しばしば学校の閉鎖性が指摘されてきたが、軽度発達障害を有する児童生徒への支援についてもその様な傾向が教師側にあるのかどうかを検討することは、現実的な支援を考える愛にゆうこうなじょうほうとなるとかんがえたからであった。

引用文献

- 三橋美典 2003 学習や行動面で気がかりな子どもたちとどう関わるか—LD, ADHD, そして高機能PDDの子どもへの理解と支援—, 中村圭佐・氏家靖浩(編著) 教室の中の気がかりな子、朱鷺書房。
- 中井富貴子 未公刊 教師支援のための「行動チェックリスト」作成の試み、平成15年

度 兵庫教育大学 修士論文。

杉山登志朗 2000 アスペルガー症候群と高
機能自閉症の理解とサポート、学習研究社。

夏野 良司 (教育臨床講座)

浅川 潔司 (")

秋光 恵子 (")

古川 雅文 (学校教育研究センター)

辻河 昌登 (教育臨床講座)

【問題と目的】

LD児やADHD児の学校適応に焦点を当ててなされた実証的な適応研究は国内外ともに稀少である。学習障害児に関する研究や支援プログラムの開発と実践は1980年代に始められている。ADHD児に対する心理学的、教育実践的な関心が惹起され始めたのは、ようやく1990年代に入ってからともいえる。各地の教育現場で起きる学級崩壊の一因とも見なされたからであったが、近年では、このような短絡的な図式でADHD児を捉えるのではなく、その発生機序や効果的な対処法・教育プログラムの開発や専門家の養成

本研究ではこのような状況を背景に、各種教育機関と連携しつつ、LD、ADHD児の教育環境への適応状態を探るとともに、教育支援プログラムの開発とそのための支援体制づくりの検討を主たる目的とする。つまり、小学校におけるLD児、ADHD児に対して、①学習面に焦点化した支援を行うことにより、当該児童の学校適応の促進を図ること、そのために、②学校教員と大学関係者による協働チームをつくり、教育支援体制づくりの形成過程を分析すること、それを通して、③スクールカウンセラーや大学教員等の学外の専門家が学校支援体制づくりに果たす役割について検討することを目的とする。

【研究計画】

本研究は、幼稚園や小学校におけるLD(学習障害)・ADHD(注意欠陥多動障害)児に対する教育支援プロジェクト研究の一環として行なわれるものであり、全体の研究計画は、次の通りである。

(1) 彼らが教育環境でどのような適応過

に関心が移ってきている。

また、平成14年に文部科学省が実施した全国調査によると、通常の学級に在籍する児童生徒のうち、LD、ADHD、高機能自閉症により学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒は約6% (文部科学省2000)であったという。これに基づき、「個別の教育支援計画」の必要性とその実施のために学校内及び関係機関や保護者との連絡調整役としてのコーディネーター的な役割を担うもの(「特別教育支援教育コーディネーター」)の検討が始められた。

程をたどるのかという点について検討するための、幼児や児童用の環境適応を測定可能な尺度を開発する。

(2) 彼らが学校で直面する問題を明らかにし、その問題解決のために、支援方策や具体的教材作成、教育プログラムの開発などを行い、その有効性を検討する。

(3) 集団生活への適応に困難を示す幼児・児童とその保護者ならびに担任教員との相談やコンサルテーションを実施し、当該児の問題のみならず、その周辺にいる様々な人々が抱く困難について、質的な側面から検討する。

(4) 研究結果をふまえて、LD、ADHD児の発達を支援する教育支援プログラムを立案し、実践して、教育環境内での効果を測定する。

本稿では、上記研究計画(3)を中心に報告する。

【方 法】

小学校において、心理的支援が必要と考え

られる児童に対し、心理教育的コンサルテーションを実施する。（教員との情報交換、支援体制及び心理教育的支援ニーズのアセスメント、定例的スタッフ会議の実施）。

対象児

対象児童（以下A男）は4年生男子。低学年の頃から問題行動（授業への不参加、校内徘徊、級友間のトラブル等）がみられた。知能検査では、言語性LDの疑いがあることが示唆されている。授業中、教室を飛び出すといったパニック発作様の行動も見られている。A男は通常学級と障害児学級を行き来している状態である。

支援スタッフ

A男の学級担任、障害児学級担任、学習支援担当教員、管理職。スクールカウンセラー及び実習生

【実践】

実践期間は初年度6月から2年度12月である。以下、支援経過の概略を述べる。

（初年度）

当初、スクールカウンセラーのいる相談室で数回の心理相談とアセスメントを行い、その後、校内でのスクールカウンセラーによる相談へと展開した。

（心理教育的アセスメントと支援方針）

A男は、3年次にWISC-R知能検査を受けており、動作性に比べて言語性検査の成績が低く言語性LD（学習障害）の疑いが指摘されていた。

同時に落ち着きのない言動の背景には、学級の交友関係また家族関係に起因する問題も感じられた。

＜学級での支援＞

- ・指示の仕方を工夫する。
- ・集中しにくいので作業時間を短くする。
- ・適正な達成目標の設定。
- ・パニックの兆候をキャッチして気持ちの転換を図り予防する。
- ・教員の側、窓側を避ける等、座席の位置の工夫。

・学級の児童にC男の理解を促す指導。

・行動化には関係スタッフ全員で対処する。

＜保護者支援と協働＞

A男の学校生活への関心が弱い。A男は、学校での情報が親に伝わることをいやがる。A男の情緒の安定と学校での行動問題の発現の防止には、家族の理解と協力が重要である。

・保護者の心情への共感と訴えへの傾聴。

・授業参観等の機会を設けA男の実態を理解を促す

・学級経営や指導方針の理解と了解を得る。

・家庭との連携・協働関係を作る

＜心理相談的支援＞

高学年になると、学校で見せる年齢不相応な稚拙な理解しにくい言動から、仲間関係が悪化しA男の自尊感情の低下や傷つきから来る二次的な問題行動が予想された。従って、学習面や学級経営的な指導と平行し心理治療的支援を行う。遊び、リクレーシオ的な活動を通して関係づくりと情緒の安定、対人関係スキルの改善、自我の発達を促す。

学内では、支援チームスタッフ会議において、指導方針を確認し、全教員がA男に対する共通理解を持ち、抱えていく中で情緒の安定を図り見守っていくこととなった。また、実習生のチーム参加が認められ、スクールカウンセラーの指導の元で相談や学習支援へ関わることとなる。

＜外部機関連携による支援＞

親の子どもの理解と障害受容が進めば医療機関受診、薬物治療の導入もあり得るであろう。

図画工作等、運動などでは優れた力を発揮するA男であるが、言語的理解力を必要とする授業になると内容が理解できず、教室内で落ち着かず廊下や他教室をうろうろしたり時折パニックに陥る。それに対して、学級担任及び障害児学級担任は、A男のパニックや粗暴な行動を全力で抱え、なだめ、諭し、少しでも落ち着いて学習に取り組めるよう指導に当たった。スクールカウンセラースタッ

フは、曜日、時間を設定し空教室に遊具や教材を持ち込んで遊びを通してかかわった。後半は、実習生が授業への参加観察の中でA男との関係づくりを心がけ、教員との情報交換を主に活動した。同時に保護者との協力関係をつくるよう働きかける。しかし、障害児学級入級に伴う親の障害受容と抵抗の問題があり学校と家庭連携が難航し、A男の情緒面での不安定さ、校内での問題行動の出現が続いた。3学期になり、ほとんど学校を休まないA男が1週間休んだことを契機に家庭訪問により父親との面談が成立し支援方針の了解を得て、次年度のA男への個別学習支援体制が本格的に検討され始めた。

(2年度)

A男が障害児学級に入級し個別学習支援を強化するために学内措置で教員が配置された。A男にとっては、障害児学級、親学級、学習支援教室という三つの居場所ができた。

A男に関わるスタッフの会議(学級担任、学習支援担当教員、障害児学級担任、スクールカウンセラーと実習生スタッフ、管理職)を定例的に開催することになった。第一回のスタッフ会議では、新しい支援体制について、各スタッフの役割分担、個別学習支援と個別学習室の利用の仕方、スクールカウンセラーとスタッフの役割、家庭との連携の進め方、医療機関受診等が検討された。会議では、IEPで用いられる諸様式の修正版を用いて、スクールカウンセラーと実習生が資料を作成し、実際に即した情報交換を行い、各担当の支援経過とその検討を行った。

学習支援担当教員はA男との関係づくりを行いながら、言語面の力を伸ばすことを中心に学習補充を進めていった。時折パニックが起きるA男に対しては、A男の愛着の強くラポートが成立している学級担任と障害児学級担任の介入が必要であった。スクールカウンセラーと実習生は、情緒面からの支援と学習支援担当教員の補助的役割を担い、A男の学習支援での教材資料の考案や準備を手伝い、実際の学習場面にも参加した。

学級担任、障害児学級担任は母親と積極的に連絡をとり、病院受診や医療機関との連携を推進する方向に動き始めた結果、夏休みに医療機関を親子で受診し言語検査や心理検査を受け、その後定期的に通院し言語訓練を受けるようになった。

運動会までは学習指導自体はやや変則的であったものの、運動や作業の好きなA男にとっては、活躍の機会が与えられ落ち着いおり、学習支援担当教員とのラポート形成も着実にできあがりつつあった。運動会が終わって、学習支援担当教員の個別学習支援が再開され、同時に、家庭連携、学外連携などを含めた支援体制と機能が形を取り始めた。支援チーム定例会議では、教員、学級担任、スクールカウンセラー、実習生が出席し経過をまとめて確認し、今後の方針を検討した。

学習支援の展開では、A男の興味関心に添った教材と方法を取り入れて進めた。学習の場所についても、場所を限定せず三つの居場所を適宜A男のニーズに合わせて使用した。A男にとって慣れた場所であり、とりわけ、すぐ隣で、他の児童らが勉強しており、学級担任もいつでも声掛けられる所であることなどの条件が整っていて、A男にとり落ち着いて学習に集中できることが分かってきたからである。

種々の試行錯誤を経て、支援チームスタッフの中にも、各自の役割認識が少しずつ修正を受けて、スタッフ相互にとってサポータイプなものへと変化していき、C男への学校適応促進的なサポート体制を支えつつあると思われる。

【考察】

○個別学習支援

2年度には、学習指導に力をいれる支援体制がスタートしたが、学校内に、学習障害児の専門的な学習指導の経験が十分とは言えなかった。2年度の前半までは、個別的接触場面ではかなりの反発を受けるなど、A男との関係づくりの苦労が多かった。この段階で

の学習に力点を置きすぎた支援には、A男の心理社会的行動面にマイナスの影響を与え、ひいては学習支援担当教員にも加重負担となる面があったように思われる。しかしながら一学期間の試行錯誤の結果、A男、担当教員にとって無理のない支援へと少しずつ修正されてきた。

○保護者との協働連携

家庭訪問や校外での面談など学級担任、障害児学級担任の積極的な働きかけの結果、母親、父親のA男の抱える課題への理解（障害受容）と支援姿勢が生まれてきた。校内に保護者のサポートと連携機能とその担い手が育ってきており、類似した悩みを抱える児童や保護者への指導支援の力を学校が蓄えてきたとみることができる。

○専門機関との連携

保護者の連携がとれ、医療機関での検査と通所指導が成立した。

○定例スタッフ会議とチーム支援

スタッフ全員での会は、月一回平均であった。その間は、スクールカウンセラーと実習生スタッフが各担当教員と個別に資料や意見の交換をしながら進めた。

定例会議による多面的な情報交換と検討には、次のような意義があったと考える。

・実態の認識が変わる（本人、家族の理解が進む。本人の生活分野ごとの能力適性がわかり、よい面が見えてくる。）

・保護者との関係が変わる。（家族の理解を共有し、複数で対応することにより教員側の態度に安定と自信が生まれる。支援方針と計画をはっきりと伝え、保護者の協力を明確に要請することにより保護者の学校依存的姿勢が弱まる。結果的に学校との協働が成立する。）

・スタッフの関係が変わる。（学級担任、障害児学級担任、学習支援担当教員そしてスクールカウンセラースタッフの得手不得手が理解されていく。お互いに弱い部分を補い補完しようとする動きが生まれる。）

・目標と計画の立て方が変わる。（一人一人の子どもの視点を入れて検討する傾向が強

まる。教科とその成績面だけでなく、子どもの人格や生活また将来を見通して目標を考えるようになる。）

・授業や評価が変わる。（個を生かすという視点で学級経営や授業展開をしていく。評価の視点が変わり、方法に工夫が生まれる。教材・教具、指導体制の改善などを検討するために教員間の協働、共通理解が促進される。）

○学習支援体制を支える役割

特別な支援を要する児童生徒に対する個別的な指導計画は、米国や英国でいうIEPの理論に基づき、学校の保護者に対するインフォームド・コンセント（十分な説明と同意）と学校側のアカウントビリティ（説明責任）を前提とした両者の協働連携の上に考えられている。

保護者との協働に基づく支援は、本事例にみられるように、保護者・家族自体への支援が含まれるため、長い時間とエネルギーが費やされる場合が少なくない。

校内における学習支援が功を奏するには、学習支援の意義と必要性について保護者がよく理解していることはもちろん、指導の実際においては家庭もしくは校外での支援役割を引き受け、長い道のりを学校（教員）と二人三脚で歩いていく姿勢が必要になる。

しかし、事例によっては、この役割が取れず、サイコエディケーションもしくは家族カウンセリングを必要とし、外部機関の専門家の支援を活用することとなる。

学校内や地域における支援資源を、子どもの支援に、とりわけ、学校（教員）にしかできないといってもよい、学習支援のために結集し構造化させる役割は、相当に高度な専門性に裏付けられた職務となるように思われる。

【引用文献】

文部科学省 2002 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」

The effects of Teachers' Attitude toward
The Child on Their Perception of Behavioral and
Emotional Difficulties in Children with AD/HD

Kiyoshi Asakawa, Masafumi Kogawa

(Hyogo Univ. of Teacher Education)

Yoshiji Natsuno

(Ehime University)

Rie Fukumoto, Chie Hiwatari

(Hyogo Univ. of Teacher Education)

Paper presented at the 2004 Hawaii International Conference on Education,
Honolulu, January 2004.

Request or comments should be sent to Kiyoshi Asakawa, Dept. of Educational and Clinical
Psychology at Hyogo University of Teacher Education, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo,

ABSTRACTS

The present research was planned to investigate how teachers' attitude toward the child affect on their perception of behavioral and emotional difficulties in Japanese children with AD/HD. Especially, in order to resolve those difficulties, teachers' needs for professional supports were assessed. Forty-four teachers from public elementary school and Jr. high School took part in the study. The Inventory of Teacher's Attitude toward the child (ITAC, 30 items) was used for the assessment of teachers' positive-negative attitude toward children in their schools. The Index of Professional Support for the child with AD/HD (IPS, 23 items) measured teachers' perception of the needs of professional supports from school counselors and Psychiatrists, faced

on some behavioral and emotional difficulties emerged by the children with AD/HD. Both scales were of be reliable.

Main findings were as follows; (1) First, results from factor analysis on the IPS indicated that the IPS was consists of three subscales, that is, attention deficits, impulsive behaviors, and difficulties-in group activities, (2) As to teachers' attitude toward the child, elementary school teachers were significantly more acceptable and empathic than those from middle schools, (3) In 2 (kind of school) \times 2 (attitude towards the child; positive / non positive) ANOVAs, Mean professional needs scores of attention deficits was higher in Jr. high School teachers than in elementary school teachers, while no significant differences were found in two other indices of professional needs. Those findings were discussed from developmental and school psychological points of views.

The Affects of Teachers' Attitude toward the Child on their Perception of Behavioral and Emotional Difficulties in Children with AD/HD

Since the 1990s, Japanese researchers have been paying attention to the issues of behavioral and emotional difficulties in classroom emerged by the child with AD/HD and/or LD. As increase of concern about children with mild developmental disabilities, both of researchers and elementary school teachers became to look for some effective educational support for those children.

According to Satoh, Okazaki, Kobashi, Ohtake, and Matsumoto (2002), having correct information about the child and planning of systematic support program in collaborations of some teachers was important for a classroom teacher to support the child. Pointing out the meaning of individual educational program, Satoh et al. (2002) stated that an assistant teacher's support was effective to avoid the anxieties and confusion in the child with mild developmental disabilities. Further, They also pointed out that professional support from a psychiatrist contributed to mental care for child's mother. In the study, professional supports were not given to classroom teacher. This might be due to a traditional belief in Japanese elementary school, in which classroom teachers should manage their class by themselves.

Given consideration to various contemporary problems raised in classroom and/or school in Japan, some professional out-resources intervening with the school systems and teachers were needed to solve problems in the classroom . In a sense, Collaborations with the external resources such as school counselors, psychiatrists, clinical psychologist, school social workers and so on are to be Important, while a teacher's traditional efforts of classroom management by him/herself may be meaningful.

Few studies were, however, done treating with teachers' needs of professional supports for themselves. Thus, the present study was designed to investigate how school teacher perceive resources' supports in order to deal with emotional and behavioral difficulties in their classroom

Method

Participants

Twenty-eight teachers from elementary schools and twenty-two teachers from Jr. high schools took part in the study. Most of participants were from wide varieties of western area in Japan. Because of incompleteness of the questionnaire, data from two of elementary school teachers and four of those from Jr. high schools were discarded.

Questionnaire

Two types of Questionnaires were used. The Inventory of Teacher's Attitude toward the child (ITAC, 30items) was used for the assessment of teachers' positive-negative attitude toward children in their schools. Participants were asked to respond the ITAC on four points scale. Total scores ranged 30-120.

The Index of Professional Support for the child with AD/HD (IPS, 23items) measured teachers' perception of the needs of professional supports from school counselors and Psychiatrists, faced on some behavioral and emotional difficulties emerged by the children with AD/HD. Both scales were of be reliable. The scale was consist of three subscales; attention deficits (11 items), impulsive behavior (6 items), and difficulties of group activities (6 items). Participants responded to the IPS based on the four points scale. So, scores ranged 11-44 in first subscale, 6-24 in impulsive behavior, and 6-24 in final subscale.

Procedures

The questionnaires were delivered to each subject after lectures of graduate course in which participants attended. Participants were asked to respond to the questionnaire in the group sessions.

Results

Affection of teacher groups and gender on teachers' attitude toward the child

First, the effects of teachers group (elementary vs. Jr. High School) and gender on their attitude of the child were examined with two-way ANOVAs (see in Table 1). Overall, the analysis revealed that elementary school teachers showed significantly more positive attitude toward the child than teachers of Jr. High School ($F=10.95$, $DF=1/42$, $P< .01$). No significant main effect of gender and significant interaction, however, were found. Those findings indicated that teachers of elementary school expressed more positive attitude of acceptance, empathy and generosity toward the child.

Table 1 Mean Scores and Standard Deviation of Teachers' Attitude toward the Child: Teacher Group by Gender

Teacher G	Gender	N	Mean	S.D.
Elementary	Male	10	90.40	5.94
School	Female	14	95.07	6.54
Jr. High	Male	9	86.66	6.92
School	Female	9	86.11	4.48

Teachers' needs for professional support

The mean scores and standard deviation of teachers' needs for professional support in each group were as shown in Table 2. Based on the results, two way ANOVAs were carried out. The only significant findings were difference between elementary school and Jr. High School in dealing with attention deficit behaviors (F1). In impulsive behaviors (F2) and difficulties of group activities (F3), none of main effects and interaction was significant.

Those findings suggested that teachers at elementary school felt less needs of professional supports to deal with wide variety of emotional and behavioral difficulties in the classroom than teachers at Jr. High School.

Table 2 Mean scores and Standard deviation of teachers' needs of Professional Supports in three Subscale: Teacher Group By Positive vs. Non positive Attitude toward the Child.

Teacher G	Attitude	Mean / S.D.	F1	F2	F3
Elementary School	Positive (N=9)	Mean	22.78	18.33	14.11
		S.D.	3.03	2.12	2.02
	Non positive (N=17)	Mean	25.71	19.00	13.82
		S.D.	5.64	2.87	3.06
Jr. High School	Positive (N=12)	Mean	26.33	18.75	14.00
		S.D.	5.19	2.86	2.95
	Non positive (N=6)	Mean	28.00	18.67	13.83
		S.D.	5.93	3.38	3.31

F1: Attention Deficit, F2: Impulsive Behavior, F3: Difficulties in Group Activities

Discussion

Those findings suggest that teachers at elementary school express relatively more positive attitude toward the child than teachers at Jr. High School. Generally, Japanese teachers at elementary school tend to be generous to all pupils including children with mild developmental disabilities. This may be due to that Japanese elementary school teachers often take some roles of school counselor. Indeed, few of elementary school has professional school counselors. Generally, Teachers would take various kinds of counselor roles in Japan. Therefore, Japanese teachers may form empathic and acceptable attitude toward the child.

Teachers at Jr. High School shows more needs of professional supports than elementary school teachers, dealing with students with difficulties of behaviors caused by the attention deficits. These findings indicate that, at younger age level, teachers could manage to control their classroom and could cope with the child with attention deficits, because of those children had relatively less power.

Further, Japanese traditional belief in education that a teacher should have serious responsibilities on his/her classroom management may be reflected upon those of teachers' tendency at elementary school.

As increasing of difficulties in behaviors with growth of the child, teachers would come to notice the effectiveness of professional supports from counselors and psychiatrists. When emotional and behavioral problems appeared in students with AD/HD become to be more complex and hard to be resolved, it would be necessary for teachers to collaborate with any professional resources.

Mental disease phobia was a characteristic often appeared in Japanese society. So, it might be hard for teachers and parents to professional resources. In recent years, however, school counselor system had been introduced public middle school. That would affect on responses of teachers at Jr. High School.

References

Satoh,S., Okazaki, k., Kobashi, Y.,Ohtake., & Matsumoto,Y. 2002 Toward providing individualized educational support for all students with “special needs” in elementary schools(Part III): A case study on a student with mild developmental disabilities in the regular education classroom. Bulletin of Faculty of Education, Okayama University, Vol. 121, pp. 85-92.